



DanHeng

×

Stella

R18



万年劣情煽られマン。
10回中8回は親友からのご奉仕だけで
事後を迎えることに遺憾の意。
かと言って自分のご奉仕しても
「安心して眠くなる」としか返されず
ご都合奇物を密かに探している。



万年性欲どこマン。
親友が気持ちよくなってるのを見
てようやくノリ気になる。
かと言ってたんたんの
存護が存護る確率は低いので
申し訳ないとは思っている。





欲を言えば
5システム時間ほど

くちづけをしたい
とは思っている



耐えられません

私はあんとと
キスする
半システム前には
激アツになっています



そうかい
ならいい

待ってがんばる
わがまま
引っ込めないで

でも一応
襲わないよう
縛ってください…

たんこ…ん…
何システム時間
経った…？

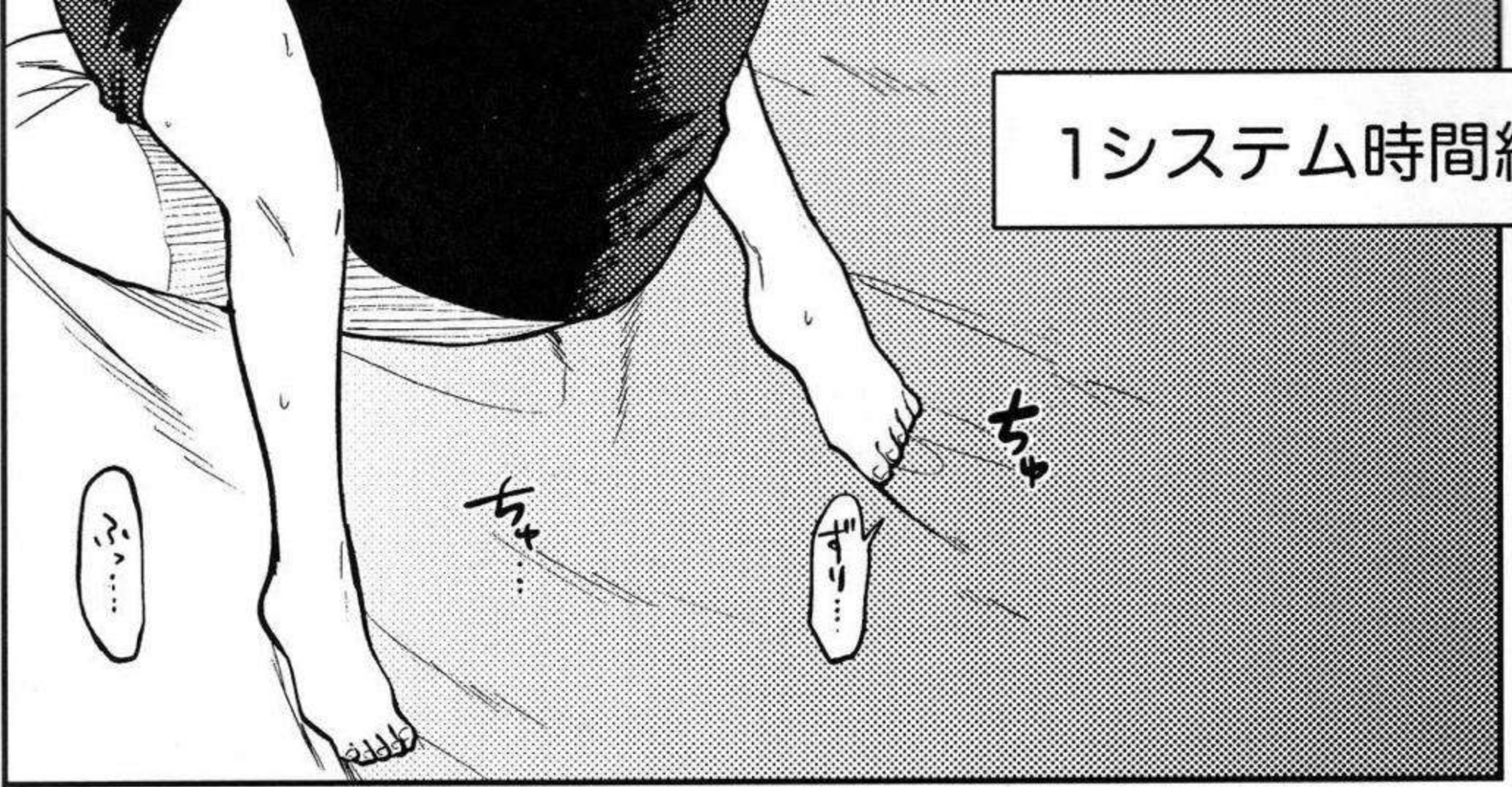
なでなで

5分

ん…

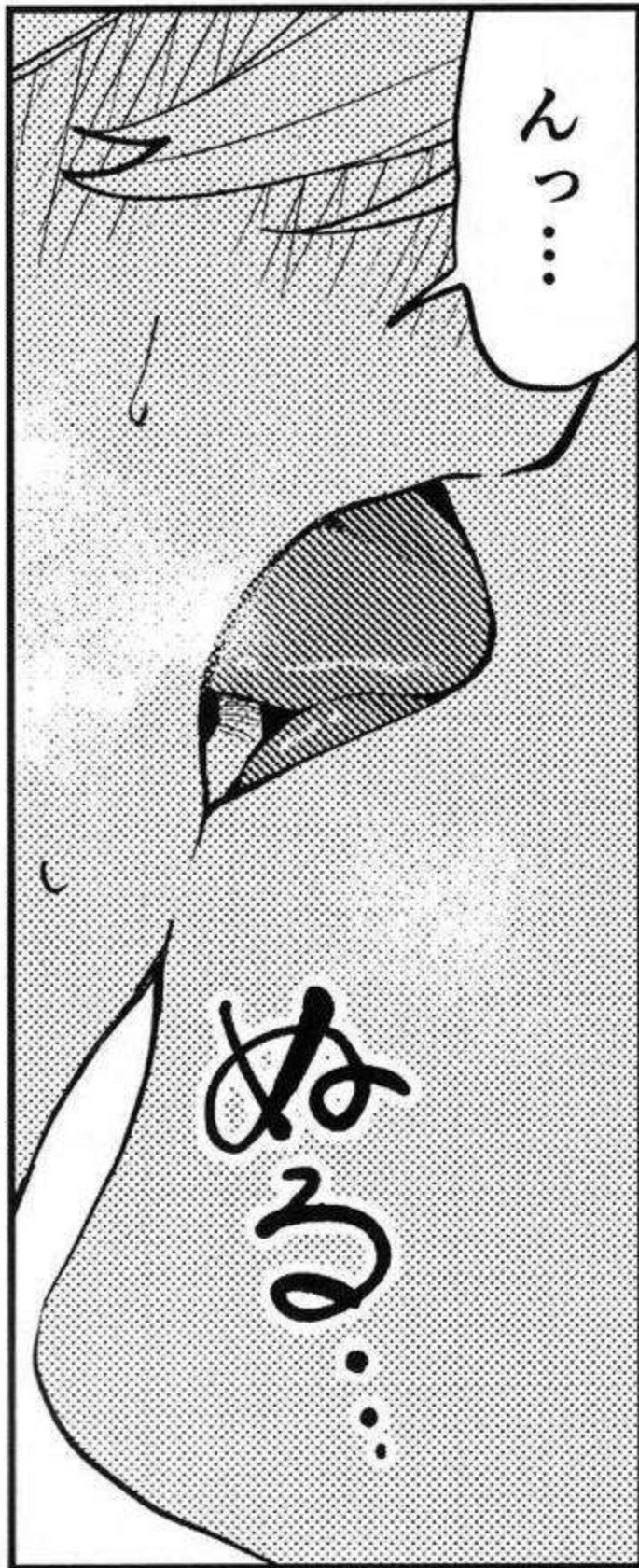
ふい

1システム時間経過



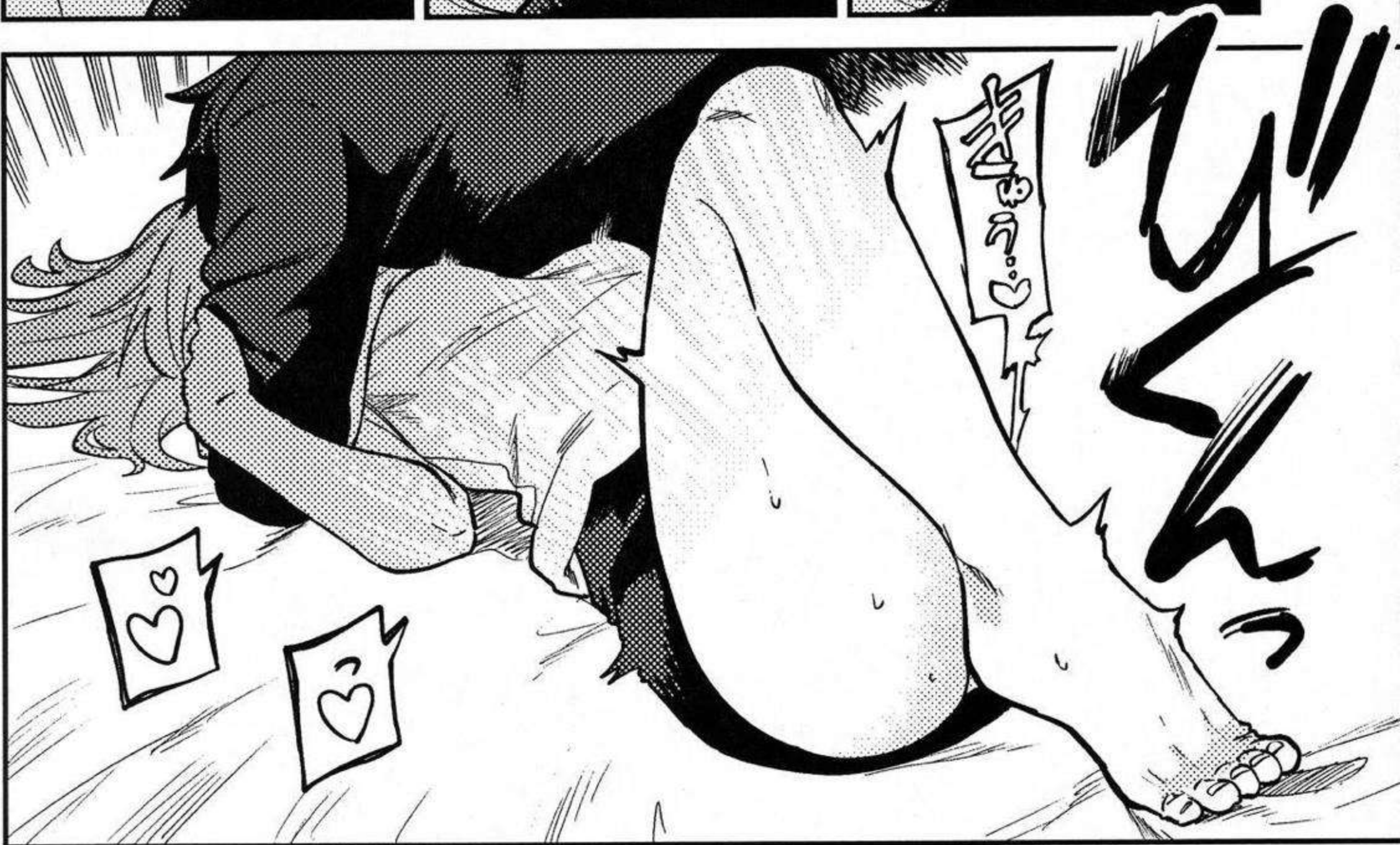
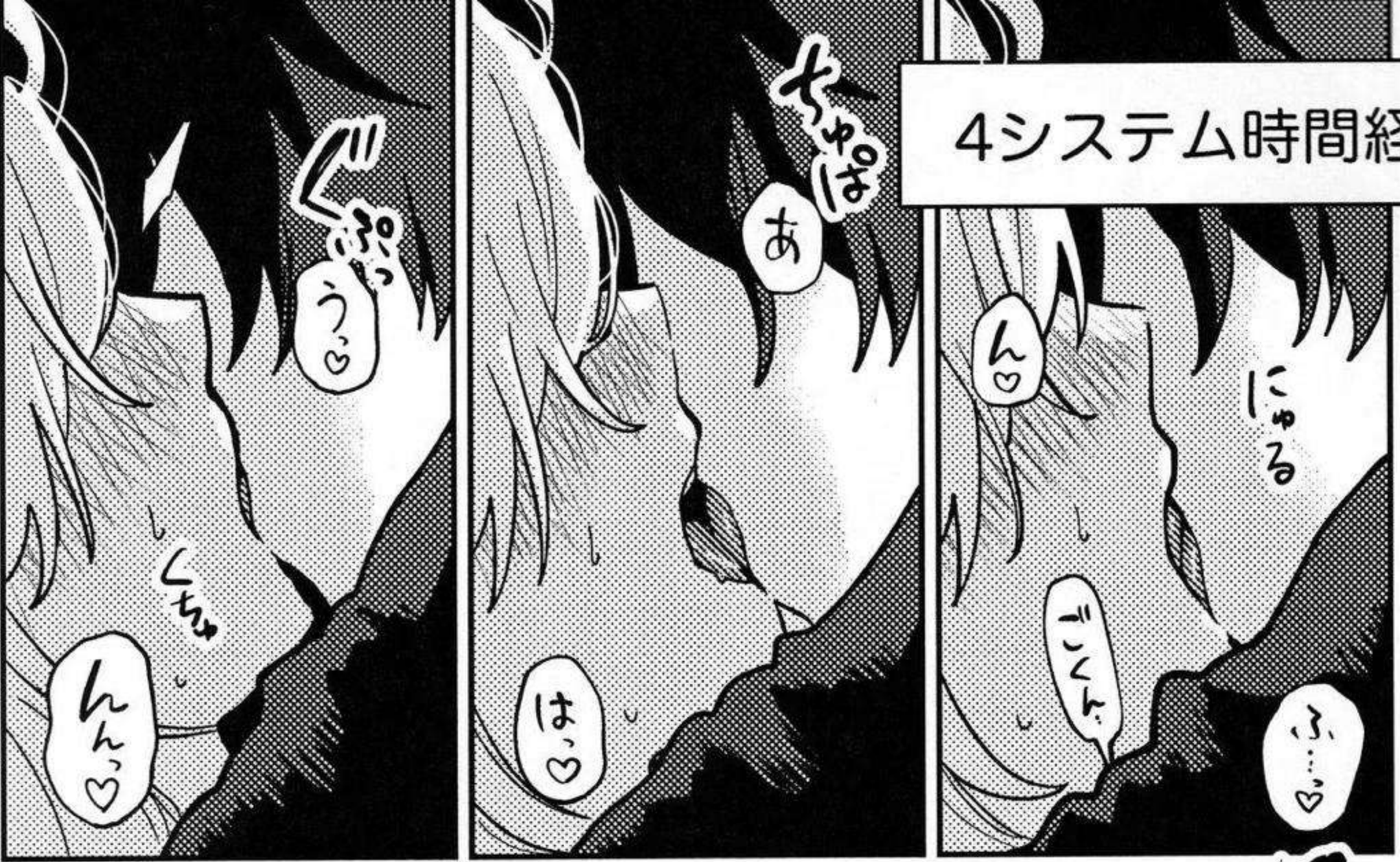


2システム時間経過





4システム時間経過



また
イツちやった

口以外なにも
してないのに



これじゃまた
丹恒だけが



いつもの顔で
私を――

わあ……



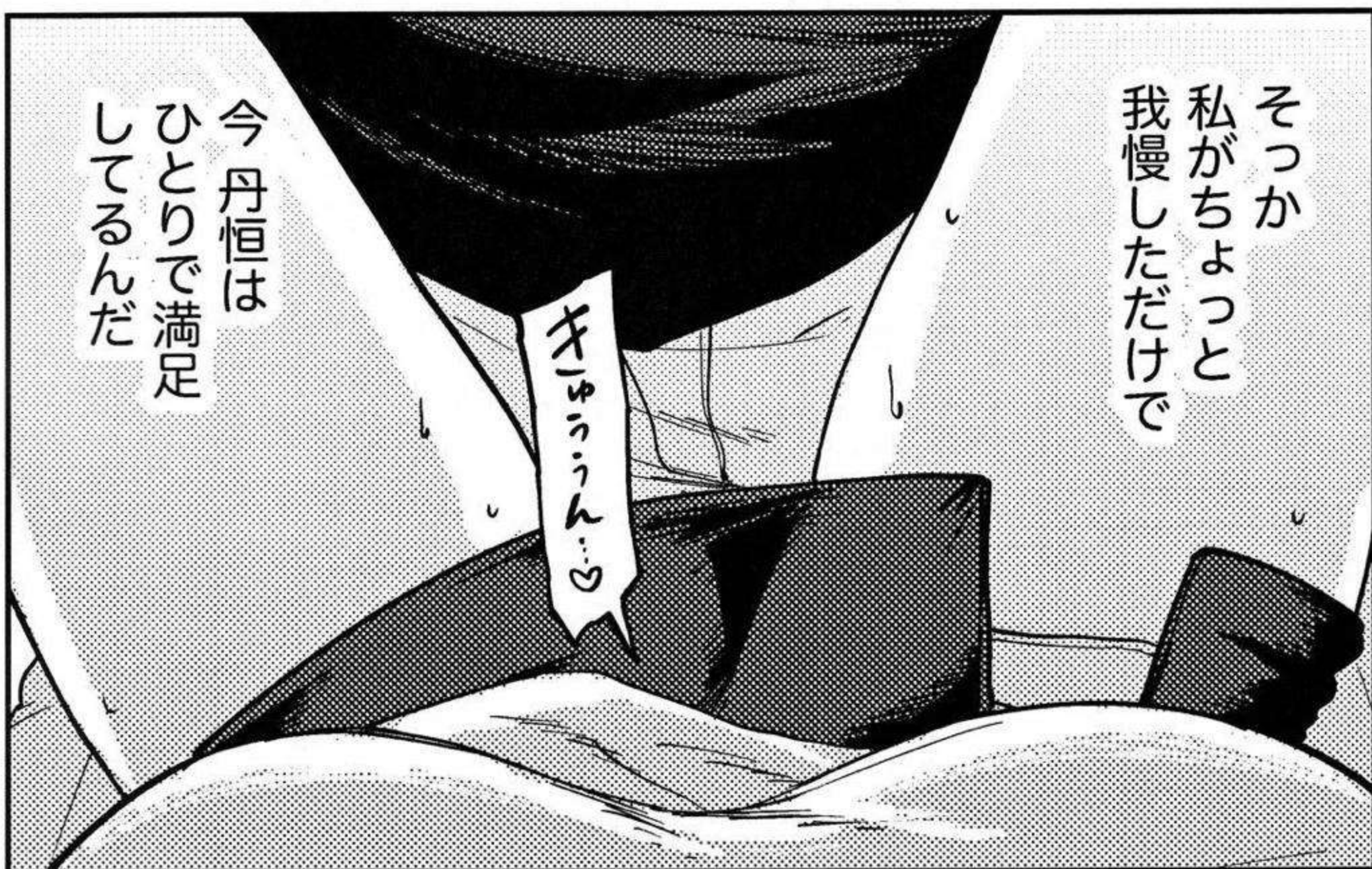
.....え
なにその顔

丹恒...
気持ちいいの？



あんた
ちゅーしたら
いつも寝ちゃ
ん...

ん...



そっか
私がちよつと
我慢しただけで

今丹恒は
ひとりで満足
してるんだ

オレは...♡



あは
はは

かわいいね
たんこお...♡

5システム時間経過



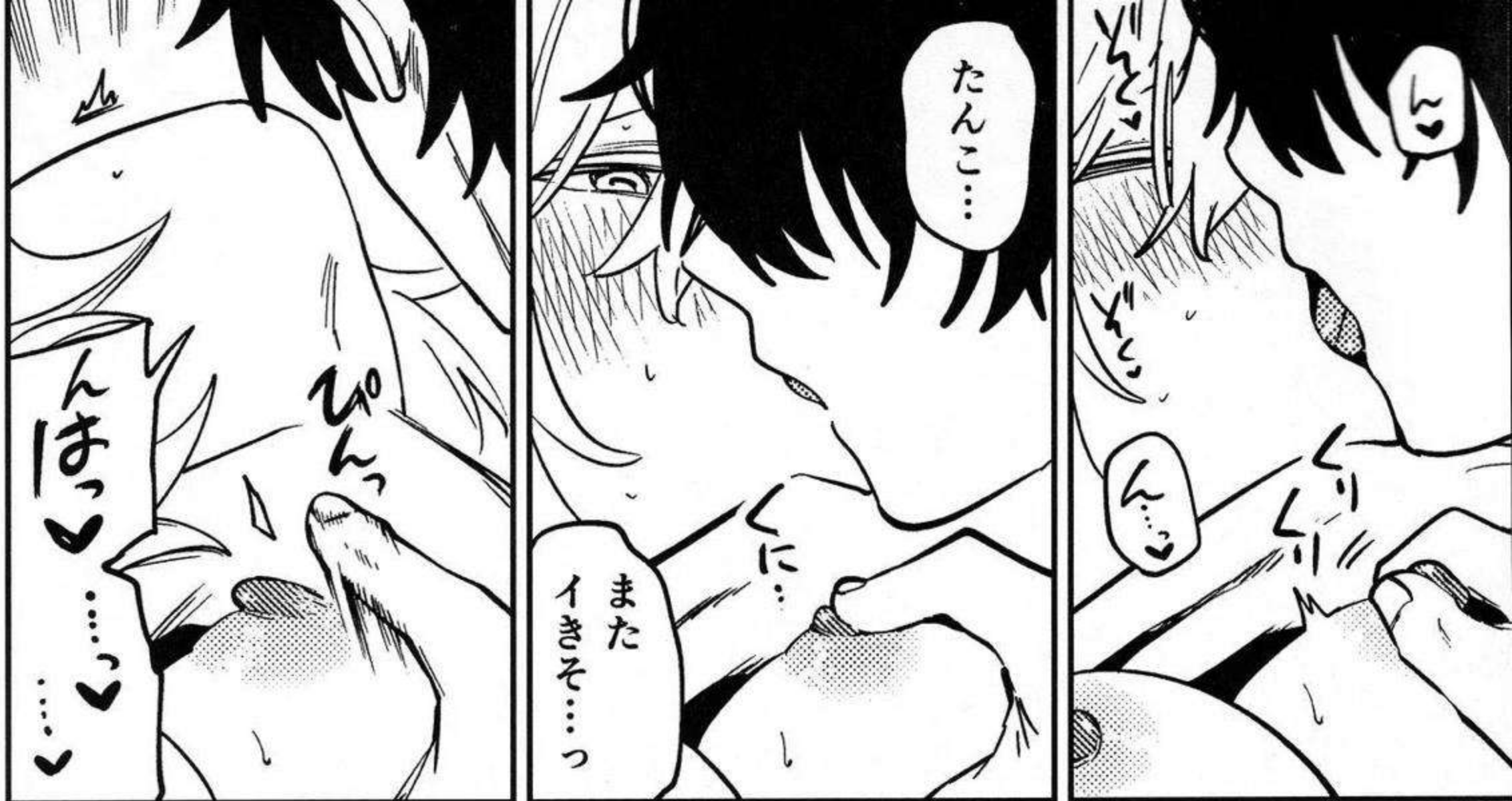
我慢させた分
めいいっぱい
良くしてやる

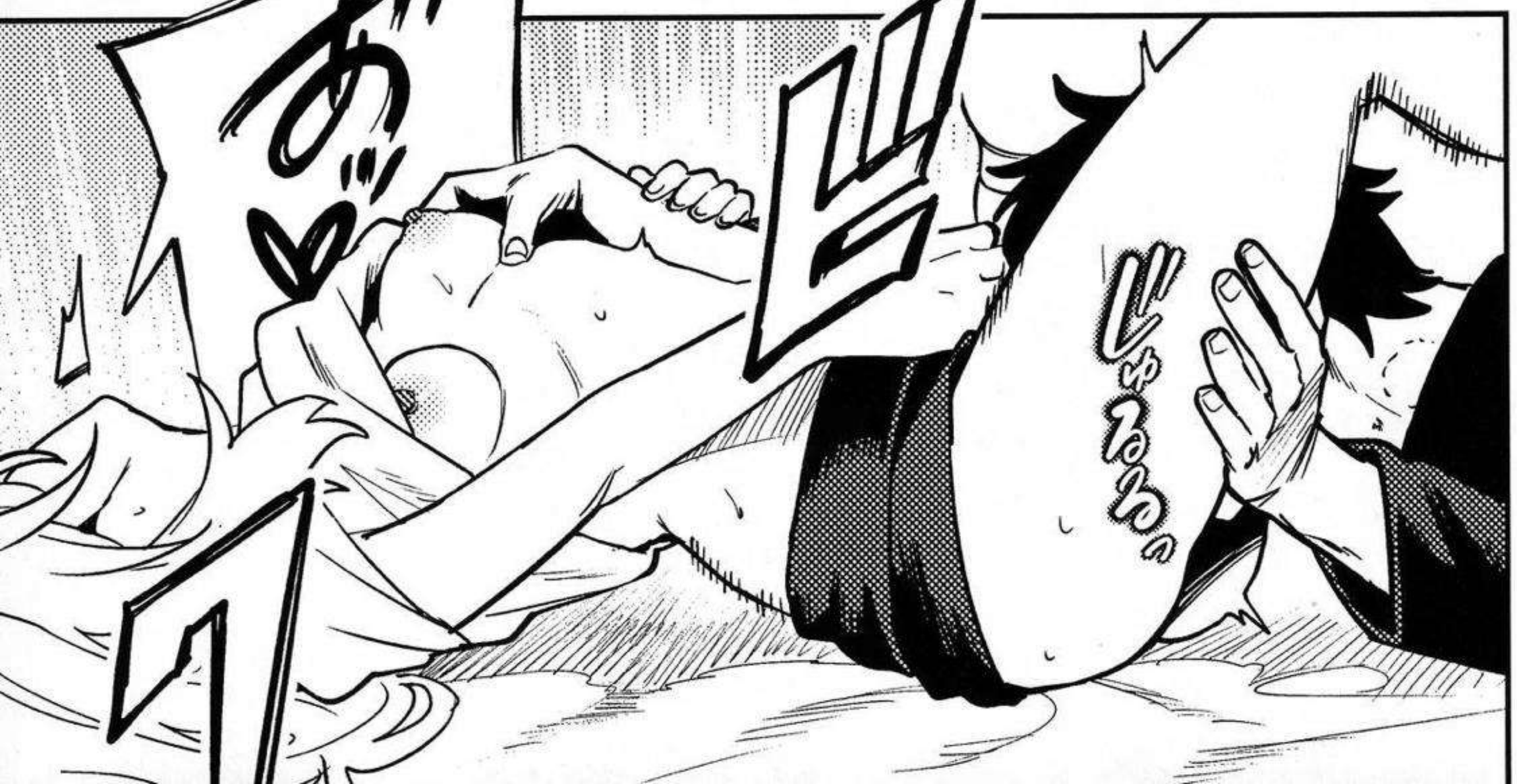
んん...

んん...

あっ.....♡







好きだろう
攻め立てられるの

あ

じゃあ
少し乱暴にする

はい

す...

あん...

はい

うん
すきい...









妥協案だ
今日はずっと
ゆっくりする

はーい

あー

んー

だから次は
お前の
望むことを
余すことなく
叶えよう

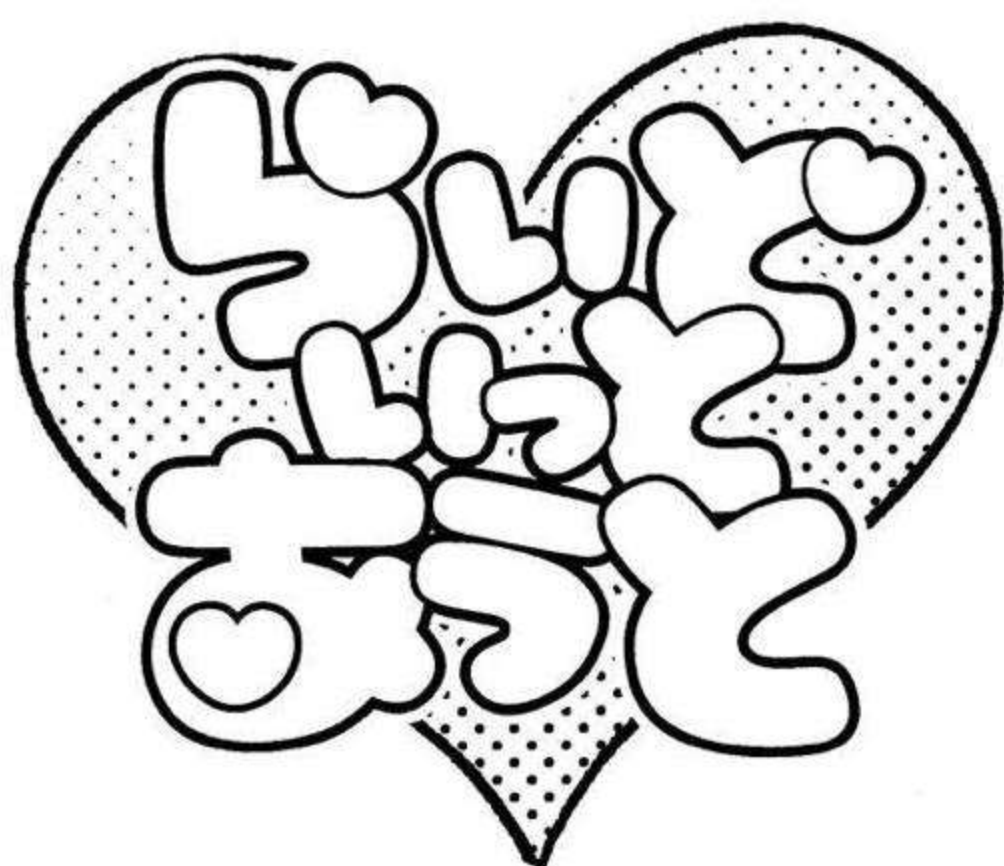
…じゃあ

私のいちばん奥
ゴツゴツ突いて
たっぷり中に注いで

腫れるまで
たくさんいじって

あんたの頭から
爪先まで
たくさん
噛ませてね…？





香の雀たちに惑う

MaiKa

考えたこともなかった。

違う。星自身が気付かなかったただけだ。

星穹列車の仲間はずもが勇敢で優しくて強くて。

開拓の精神に生きる、尊敬できる人たちばかり。

だから甘えていた。あるいは気付かないふりをしていたのかもしれない。

時々、忘れかける。記憶や過去。旅の目的。星核を宿す器。不意に現れる壊滅の影。

だから報いを受けるのだ。居場所を与えられ、温もりを知り、仲間を得た代償として。

星は知る。対価を払う残酷さを。それが自分ではないことも。

己の浅はかさに打ちのめされながら。

埃の舞う暗闇の中、じっと目を凝らす。

古い木造の家屋。天井の板の隙間からかすかに光が差し込む。今にも崩れそうだ。

やがてかすかな足音が響いた。方向を探れば影が動く。人だと認識することは一瞬で。それが複数であることも確認できた。

証拠は十分。星は反射的に飛び出した。

「星、待て……ッ！」

丹恒の制止は遅かった。すでに彼女は五人の人影と対峙している。

「あんたたち何してるの」

星はいきなりケンカ腰で話しかけた。

普段にない振る舞いだが、確証はある。

薬王秘伝。彼らはその残党だ。

誰もが個人を特定されなかったためか厚手の外套や覆面を見にまとっているものの。丹恒との綿密な捜査によって身元は割れている。星にとってはその姿でも名前を当てる自信があった。

彼らはスターピースカンパニーの市場を荒らす密売人たちだ。

偽の売買を依頼して、この星槎海中へ誘い出した。

罪状は明白。言い逃れなど許す気はない。全員の身柄を拘束する。

そう意思を込めた視線を送る。

互いに沈黙すること数秒。残党のひとりがわずかに身動ぎした時だった。

ガシヤンと床に叩きつけられたのは灯籠だった。

周囲を照らすと同時に炎が地面を舐めていく。

続けて彼らが動く。再び腕を振りかぶり、何かを投げつけた。ゆつくりと放物線を描いて星に向かってくる。さきほどのアクションは目くらましだと理解する一方。揺れる影を見入ってしまう。

「星ッ!!」

丹恒の声とともに腕を引かれる。

眼前には見慣れた背中が現れた。立ち位置が入れ替わったと悟った瞬間、丹恒が腕を払って何かを叩き落とした。ガシヤンッと金属製の器が割れた。中から薄紅の煙が立ち込める。

「丹恒!」

急いで駆け寄ろうとする星を手で制止させた。近

寄るなと告げられたようで動けなくなる。

向けられた視線で察した。この状況で殺傷能力の高いアイテムを使わない時点で警戒するべきだ。煙から判断して吸い込むことで何らかの効果を生む香かもしれない。うかつに近寄っては被害を大きくするばかりで捕縛の機会すら失われてしまう。

そうしている間に薬王秘伝は逃走をはかる。足止めとしては最高のタイミングと判断力だ。星は齒噛みする。

「洞天幻化……」

丹恒の低い声音で星は我に返る。彼は口元を押えたまま、撃雲を構えた。

「長夢一覚!!」

ドンッ!!

一閃ともいえる直線の軌道。家屋を這う炎すら薙ぎ払い、閉じられた扉を突き破って逃走者を捉えた。誰もが地面に倒れ伏している。逃れた者はいないことを確認してから。

「く……ッ」

膝をつく丹恒。呼吸を止めているのも限界だ。少し吸い込んだのかもしれない。

「丹恒！」

星も槍を構えた。叫びながら崩壊寸前の床に突き立てる。

「存護の槍よ！ 丹恒を守って！」

槍から放たれた炎が弾ける。薄紅の煙を浄化するように。丹恒の周囲から火の粉が淡く消えていく。

「丹恒！」

駆け寄って触れようとする。

「ぐっ！」

肩を掴んだ瞬間、丹恒がうめいた。激痛に耐えるかのように。身体をよじって倒れ込んだ。

「……丹恒？」

何か不穏な気配を感じた。ぞくりと背筋に悪寒が這いあがる。

「落ち着くんだ。星」

気付けばヴェルトに背後から声をかけられた。いつのまにか応援に駆けつけてくれたらしい。

彼の手によって抱き起された。ぐったりした様子で目を閉じている。

介抱される丹恒を見つめながら。

漠然とした不安がよぎった。胸騒ぎがする。ひどく落ち着かない。

ことの発端はジェイドからのメッセージから始まった。

数カ月前からスターピースカンパニーの情報ネットワークに【情報源】が不明の違法薬物が紛れ込んできたという。それ自体は特段珍しいことでもない。大抵がアンチエイジングなどの美容系や万病に効く健康食品などの効果が保証されないものばかりだ。ただし、ジェイドの調査によればそれらとは異なる種類のドラッグだという。それも確実に闇で取引されている可能性が疑われた。

表向きは難病の治療薬とされている。あるいはサプリメントのような栄養補助食品、アロマのような香水や香など。種類は様々。実際の効果は精神を鎮

静または興奮させるもの。幻覚や夢を引き起こすもの。確実に心身に害をなす、麻薬のような危険な代物だという噂が尽きない。

闇取引であろうとなかろうとスターピースカンパニーの領域でそんな横暴を許せば信用問題にかかわる。

アベンチュリンやトパーズの協力を得て、本格的な調査に乗り出すも容易に尻尾を掴ませない。そのことにジェイドは別の疑念が浮かんだ。

「一見するととても用心深く、緻密な隠蔽工作のお得意な組織に思えるけれど。実際は何の後ろ盾もない素人の茶番かもしれないわね」

特別なコネクションがないからこそ、客を選ばずに売りさばいたのだろう。人伝に噂は爆発的に広まったものの、一部の人間への供給しかできない。ドラッグの効果も高いため、数回の使用で死に至る。それが強固な秘密保持となり、捜査が入ったとして

も隠蔽工作の必要もない。

ジェイドたちの情報網にかからないのも、相手が用心深いからではない。個人間の対面で取引しているため、システムの盲点を運よくかいくぐっただけに過ぎない。それでも異常に鼻が利く。ジェイドたちが動いていることを知っているというよりは普段と違う事態に遭遇すれば取引の中止を迷わず決断した点だろう。素人といえど、その分別がついていたことが事態の発覚を遅らせた。

残党全員の捕縛を確認したのち、星は丹鼎司を訪れる。

丹恒の診察はすでに済んでいたらしい。眉根をよせた白露は重々しく口を開いた。

「これは『雀断じゃくだんの香』かもしれぬ」「じゃくだん……?」

なのかが反芻する。耳慣れない単語だ。単に星やなのかが疎いだけかと思ったが、ヴェルトも同様の表情を浮かべている。その点からあまり

有名な薬品の類ではなさそうだ。

白露の隣に立つ霊砂の表情は翳っている。状況から見てもただの香を足止めに使った可能性は低い。何らかの作用がある代物だと思われる。

「私たちの知るかぎり、見たこともない症例です」「わしも風の噂に聞いただけじゃ。おぬしらが押収した文献を確認しなければ特定は厳しかったぞ」

「……どうということ？」

なのかは事態がのみ込めないようだ。

星もわかることはかろうじて白露たちが苦心して病名を突き止めたことぐらいだ。霊砂もそれを察したらしく補足説明をしてくれた。

「薬王秘伝の古い文献にあります。この時点では実在しない妙薬ですが、製造に成功したようですね」

「どういう薬なんだ？」

ヴェルトの問いに啣薬の龍女が頷く。

「感覚過敏という言葉は知っているか？」

「確か、五感が鋭く敏感で生活が困難になる状態だったと記憶しているが……」

「それって後ろから声をかけたり、足の裏をくすぐられた時みたいなの……？」

なのかが頭をかきながら困った表情を浮かべる。ヴェルトの言葉から想像した状況らしい。確かに五感が鋭い場合、驚いたりくすぐったい感覚が強く作用するかもしれない。納得する一方、それが丹恒の症状とどう繋がるのかが気になる。

白露もなのかの言葉を肯定もしなければ否定もしなかった。ただわずかに視線を伏せるのみ。

「似て非なるものじゃ」

啣薬の龍女は自身の小さな掌を見つめる。白の薬包紙にの中身。それは丹恒が吸いこんだ香と同じものだ。押収品の中から発見し、治療の役に立てばとなのかに預けたものだ。彼女の手によって白露と霊砂へと渡り、原因の特定に至った。

「この雀断の香は人為的にその刺激を受ける感覚を過剰に強く反応させる効果がある。それこそ激痛が走るくらいに」

白露の言葉を理解するのに一瞬だけ反応が遅れた。

(……激、痛?)

ゆつくりと浸透するように。理解と共に胸騒ぎが
忍び寄る。

「それって丹恒が……?」

なのかは口元に手を当てる。その顔は少し青ざめていた。星と同じ結論に行き着いたらしい。

香を持っているだけで不快だと言わんばかりに啣薬の龍女は顔をしかめた。

「何より厄介なのは、服薬した相手が最も気を許した対象に強く作用するらしい。それこそ失神するくらいだという。ふざけた話じゃ」

寝台に座る丹恒と目が合う。

その瞬間、全てを理解する。

彼は自分が触れたことで激痛が走り、意識を失った。星のせいだ。

指先の震えが止まらない。呼吸も乱れる。続けられる会話がすり抜けていく。

「しかし。なぜ、そんな薬を……?」

ヴェルトの当然ともいえる疑問にふたりが沈黙す

る。視線を見合わせた仕草でわかる。白露も霊砂も予測がついているようだった。

「異性に触れなければ子は為せぬ」

ぽつりと呟かれた言葉。

星の心臓がどくりと跳ねた。

その先を聞きたくなかった。いやな予感がする。

「時の覇者に盛れば後継者は生まれない。その目的の為につくられたのでしょうか」

霊砂の説明は予想していたものだ。気が遠くなる。それが何を意味するのか。

「正確には古い文献に似た効果を持つ妙薬の記述があります。刑罰のひとつとして考案されたようですね。実用化にはいたらなかったようですけれど。それに薬王秘伝が目をつけ、製造したと思われます」

白露「悪趣味じゃ」と荒い鼻息を吐いた。

血の気が引いていくのが自分でもわかる。かすかに寒気を覚えた。

「星……あんた大丈夫? 顔が真っ青だよ」

なのかの指摘で我に返る。反射的に「大丈夫」と

返事をしたものの。思っていたより弱々しい声音に驚く。

動揺を悟られないように。平静を装う。視線をあげて失敗した。眼前には沈黙を貫く恋人の姿。

丹恒が顔をしかめる。まるで傷の痛みをこらえるような。その表情で息がつまりそうになる。苦しくて呼吸ができないほど。

そのまま星を見つめる。つい視線を逸らしたくなる。

（私のせいだ……）

無意識に唇をかみしめる。

拒否は認められない。反駁も許されない。星はこの痛みに耐えなければならぬ。そう覚悟する。

「だからつらいとは思いますが星は近寄ってはならんぞ」

近寄れない。近寄りたくない。

怖いと思った。丹恒ではなく、自分自身が。

ヴェルトが焦ったように呟く。

「まさかずっと丹恒はこのままなのか？」

「ああ、安心せい。本来なら丸薬で服用されるべきところを香として少し吸っただけじゃ。毒性もないから体外へ排出されるのを待てばよい」

会話がやけに遠くに聞こえる。まるで他人事のよう。

「老廃物の排出を早める薬湯を煎じましょう」

「頼む」

治療方針が決まったようだ。

わかりきったことだ。星にできることはない。

失望や無力感はなかった。考えていたのは別のこと。こんな状況になって気付かされる。

激痛に耐える丹恒の横顔。強い衝動に駆られた。思うことはただひとつ。

（私……最低だ）

己の浅はかさが恨めしい。

どうしてすぐに気付かなかったのか。

きっとこれが初めてではない。

星の存在が丹恒を苦しめている。今までも。これからも。改めて思い知らされた。

星核を宿す器。カフカとの関係性。壊滅との因果。旅の目的。運命の最終地点。それらは絶えず星の存在と共にある。彼の側にいると忘れそうになる。

自分は生かされている。大いなる目的のために。漠然と受け入れている未来。己が進む道の先。生命の果てる瞬間。きっと丹恒の手を離す時が来る。星自らの決断によつて。

丹恒はそれでも構わないと断言する。未練も後悔もない。確信できる。でも、だからこそ苦しい。

星を抱きしめる度、その腕が傷ついていく。

果たして耐えられるだろうか。

そんな漠然とした問いが浮かぶ。きっと丹恒は星の手を握り続ける。たとえ痛みが派生したとしても。痛みに耐える丹恒の表情。ずっと見届ける。その覚悟を。

星は改めて思い知った。

丹恒はしばらく丹鼎司にて療養することが決まった。

星穹列車ではかえって気が休まらないだろうという白露の提案があつたためだ。特に異論もなく、星穹列車もしくは休養をかねて羅浮の地に留まる方針になる。

そんな経緯さえ、星はどこか他人事のように受けとめた。いや、そうするしかなかったという表現が適切か。それは何かから己を守ろうとする本能からくるもの。さらには『それ』を自分自身、決めかねている。星はそう感じていた。

どこか感覚が麻痺したように思考が働かない。ふらふらとした足取りで目的地へと向かう。普段と同じく御薬の龍女がいる場所へ引き寄せられるように。

「白露」

「星か」

声をかけると患者に囲まれていた少女は振り返った。その表情は神妙な面持ちだ。

それだけ星が固い表情を浮かべているのだろう。知っていて冗談すらも思いつかない。取り繕ったと

ところで白々しくなるだけだ。

白露は困ったように眉根を寄せた。彼女も星に対する言葉が浮かばない。そんな様子に見えた。

気を遣わせたくない。ならば長居は無用だろう。

「これを丹恒に」

なるべく時間をとらせないよう、言葉少なに右手を差し出す。指先には茜焰草さいえんそうが握られていた。

茜焰草とは浄化効果の高い薬草の一種だという。

根が鮮やかな茜色をしており、浄化力の強い炎を連想させることからその名がついたと聞く。

丹恒を残して列車へ戻ろうとした時。白露と靈砂がこつそりと教えてくれた。

効果は高いものの、自生している場所が危険が多い。高地な上、魔陰の身が多く徘徊する地域だという。星のような旅慣れた腕の立つ人間でなければ採集が難しいとも。

だから、こんなことしか思い浮かばなかった。彼女たちの治療の手助けをすることくらいしか。

丹恒の横顔が思い浮かぶ。じっと見つめる視線の

先。そこには何があつたのか。星は思い出すことができない。それでも。

一日でも早く彼の痛みが和らぐように。祈りを込めて。

「助かる」

「それじゃあ」

足早に踵を返すと茜焰草を受け取った白露が首を傾げる。

「丹恒に会わないのか？」

星は何も言えなかった。言葉が出てこなかった。

曖昧に笑う。

きつとひどい顔をしている。

容体を聞いたところで快方に向かうのだろうか。

顔を合わせて何を話せばいいのだろう。かける言葉が見つからない。

白露に考えていたことが伝わったのかもしれない。何かを言いかけて押し黙った。

奥歯を噛みしめる。

こんな時に思い出す。何故と問うよりも先に怒り

が湧く。

丹恒の腕を。彼の声音を。温もりと安らぎ。

そしてわずかな切なさ。

自嘲したくなる。己の浅ましさを。

心地よい潮風が頬にあたる。

丹恒は窓辺に腰をかけながら古書を眺めていた。

文字を追っていた目をとめる。かすかな気配の変化に気付いたからだった。

ゆつくりと立ちあがり、室外へ出る。

「星か？」

声をかけた瞬間、気配が消えた。

「丹恒……」

視線緒先にいた白露の顔が曇る。おろおろと自分と正反対の方向を交互に見る。

どうやら先ほどまで星がいたらしい。白露が見ているのは去ってしまった星の行き先だろう。

見えずとも思い出せる。彼女の振り返らない背中。それが少し俯いている。

その原因は他ならない自分であることを丹恒は自覚している。

今でもまぶたの奥にある。目を閉じれば、青ざめた星の表情が思い浮かぶ。戸惑い、恐れ、後悔。そんな顔をさせてしまったのは丹恒自身。

刑罰のために作られた妙薬。子孫の縁を断ち切る。生命の営みへの楔。その効能が持明族である自分に作用するとは皮肉な話だ。

「丹恒。星は……その」

「白露」

おずおずといった口調で言いよどむ少女の名を呼ぶ。

星を知るまでは思いもしなかった。他者と想いを繋げることへの喜び、葛藤、戸惑い。すれ違う想いも孤独や寂しさ、もどかしさすら。彼女が教えてくれたさまざまな想い。時折、嬉しさよりも歯がゆさの方が勝ることさえある。

それでも煩わしいとは思わない。ましてや知らないければよかったなんて思わない。

結論などとうに決まっている。

「俺なら平気だ」

白露を見つめて力強く断言する。

「きつとあいつは思い違いをしている」

星の傷ついたような表情。自分のせいで彼女が痛みを感じたなら丹恒も分かちあうだけだ。傷を癒すことも痛みをとり除くことも。できないならせめてともに耐える覚悟はある。

ただしその前に誤解をとかなくては。彼女の想いを知って、自分の気持ちを打ち明けて。互いの道の先を探す。

その誓いを実行するだけだ。

丹恒の療養に入ってから数日が過ぎた。

毎日のように星は丹鼎司を訪れた。白露に茜焰草を渡し、丹恒と顔を合わせないように。いつものようにそつとその場を後にしようとして。

「星」

どくりと心臓が跳ねた。

背後からかけられた声。低い穏やかな、耳慣れた声音。ずつと聞きたかった。そして聞きたくなかった。知っていた。耳にしたら動けなくなってしまうことを。

それでも平静を装って。ゆつくりと振り返る。

「丹恒……」

視界には会いたくて会いたくなかった相手がいる。胸がざわめく。嬉しいような、切ないような。怖いような。

星はその気持ち全てをのみ込んだ。決して表情には出さない。

漠然と感じる。今の自分がしてはいけない気がしたのだ。

丹恒の前で全ての気持ちをさらけ出してしまふこと。それだけは許されない気がする。

「少しいいか。話がある」

丹恒の態度は普段通りだ。顔色は悪くなさそうだ。相変わらず感情は読み取れないけれど。それだけでなぜか泣きそうになる。

体調は。経過は。丹鼎司を出てもいいのか。列車に
戻れるのか。

聞きたいことはたくさんある。なのに言葉が出て
こない。

断る理由を迷っていると丹恒は沈黙を了承と捉え
たらしい。すぐに踵を返して歩き出す。

こんな時、気付かされる。

丹恒は普段から淡々と用件を伝える性分だけに、
その態度に恐れを抱くことがある。

今の星にとっては怖く感じる。何を言われるのか。
その言葉は間違いなく自分の心を強く揺さぶるもの
だ。あるいは星の言葉を求めるのかもしれない。今
の星の気持ち。

それが怖い。問われたら何を言うべきなのか。彼
女自身、迷っている。

恋人の後ろ姿を見つめながら。ぼんやりと考える。
丹恒の手を離す。そんな選択肢もあるのかもしれ
ない。

丹恒が向かった先は鱗淵境だった。

穏やかな潮騒と軽やかな風が心地いい。そんな感
覚とは裏腹に暗澹とした気持ちに支配されている。

そんな星を知っているのか、丹恒は黙々と歩き続
ける。

頭龍大雫殿。

丹恒がようやく立ち止まった。星もつられて足を
とめる。ゆつくりと振り返る恋人の顔をぼんやりと
眺めていると、

「ああ」

少し低いかすれた声が耳に届く。同時に柔らかな
温もりに包まれた。

「やつとおまえに触れられる」

丹恒に優しく抱きしめられたと知る。星は頭が真
っ白になる。

思わず顔をあげてしまう。

「丹恒？」

「正直」

どうしたのと訊ねようとした声が制止される。珍

しく丹恒が遮ったからだ。抱きしめてくる腕に力がかもつたのを感じる。

「おまえのあの表情には堪えた」

丹恒の顔は困ったような、それでいて悲しそうに笑う。

彼の言わんとしたこと。すぐに察して星は唇を噛んだ。あの時、取り繕えばよかったと後悔する。

ヴェルトたちと共に診断を聞いていた、丹恒の表情。どんな感情からくるものなのか。そこでふと気付いた。もしかしたら彼は星の表情に動揺したのかもしれない。そんな可能性が頭をかすめた。

丹恒が身体をわずかに離す。

「すまない。俺はもう平気だ」

まっすぐに見つめ返された。

普段と同じ、星の知る丹恒だった。本心だと信じられる。嘘偽りのない誠実な言葉。

それだけに胸が痛い。涙があふれそうになる。

彼はすべてを分かち合おうとする。星の迷いも恐れも戸惑いも。星を抱きしめる度に傷つく痛みすら。

拒絶など知らないかのような。星のすべてを認めて受けとめようとする。受け入れようとする。

それだけでどうにもならない。切なさや愛しさと嬉しさが交錯して涙があふれてとまらない。

もういいと思った。何もかもを捨てて今すぐ丹恒に縋りつきたい。腕の中にいたい。そうすれば不安も恐れも消えてしまいうだろう。確信に近い本能。このまま彼にすべてを委ねることができたなら。淡い期待が頭をかすめる。

それでも。

「私……」

必死に言葉を絞り出す。

星は伝えなければならぬ。このまま流されたらきっと後悔しか残らない気がした。

どんな結末になっても。せめて誠意だけは失いたくない。星が星であること。それを自分からなくしてしまつたら。身勝手な欲求でしかない。丹恒に対する裏切り、侮辱にもなる。

「ずるいんだよ。丹恒の気持ちに甘えてた。私、全

然わかつてなかった。自分のしてること」

ぽろぽろとあふれる涙と共に。今までの自分を恥じる。

丹恒の気持ちを利用して、星は自分のしたいようにしてきた。自分を曲げなかった。全力で生きてきた。その事実の裏で丹恒が傷ついていたかもしれない。気付きもしなかった。思い至りもしていなかった。

星のルーツ。星核を宿す器。カフカとの関係性。壊滅との関連性。課せられた役割。あらゆる事実を前に立ちすくむ。

所詮、過ぎた願いだったのだ。

丹恒と心を通わせ、想いを繋ぐ。ともに歩むささやかな幸福など星には得られるはずがない。

それを無視して彼の側にはいられない。都合がよすぎる。今まで気付かなかった己の浅はかさが恨めしい。星は懇願するしかない。

「ごめんなさい……!」

もう終わりにしよう。

声が震える。想像以上に弱々しい。ますます自分に嫌気がさす。

丹恒に別れを告げることを躊躇っている。

最低だ。

彼を拒絶する言葉を口にすることができない。

一方で、支配される感情はただひとつ。丹恒に自由を。

これから先も彼が傷つくと知っていてともに歩くことはできない。

「だから、私……」

その先は声にならなかった。

彼の腕から逃れなくては。丹恒の手を離さなければと思うのに。できない。

星は改めて思い知る。丹恒の存在は想像以上に大きい。もう失うことを考えられないほど。

ただ側にいたい。

最低だ。

本心は離れたくないと叫んでいる。矛盾した気持ち星を動けなくする。

星の瞳に再び涙があふれた時だった。

「星」

真剣なまなざしの丹恒が名を呼ぶ。有無を言わせないように。

顔を覗き込み、再度まっすぐに見つめ返された。射貫くような視線に目をそらすことができない。

「俺はこの手を離す気はない」

そつと手を握られる。指を絡めて丹恒自身の胸に押しつける。まるで己の心に誓うように。星を離さないと言言するように。

「今、この手を離しておまえを失えば後悔しか残らない」

さらに強く握られる。決して離すまいと。そんな意思を感じた。

星の目は眩みそうになる。今の気持ちは言葉にならない。驚きや混乱、戸惑い。胸を締めつける切なさ。そしてかすかな喜び。

丹恒の気持ちは揺るがない。心はとうに決まっているのだ。

どれだけ傷つこうとも。その痛みすら受け入れて。今までもこれから。

「俺はおまえとともに在る」

丹恒の声音が強く鼓膜を震わせる。星の身体も心も、呼応するように痺れて動けない。思考も麻痺する。

「俺は全力を尽くす。今までもこれから。たとえ、おまえ自身が果てることを望んでいたとしても」

挑むような視線には強い光を宿していた。

星は知っていたかもしれない。

丹恒の強い覚悟。いつか、そう遠くない未来に星と別れても。二度と会えなくなっても。互いが息絶えても。

傷や痛みを得ても構わないと断言する。

「だから頼む」

苦しげな表情は一瞬。強い光を帯びた瞳が星を捉える。

「俺の気持ちは無視しないでくれ」

視界が滲む。もう立っていられない。

揺すぶられる。強く強く。

心が。身体が。意思が。

彼の覚悟に立ちすくむ。一瞬、星の選んだ道が見えなくなりそうだった。

丹恒はすべて理解している。自分の気持ちも。星の気持ちも立場も向かうべき先も。訪れるであろう結果も。知っていて星の手をとり、星の願いを叶えるべく己ができることを模索し続ける。一瞬でも長く星とともに在るために。

涙がとまらない。

彼にとって傷の痛みなど別れる理由にはならない。派生する痛みを恐れていたのなら最初から星の手をとらなかつただろう。彼も自分の言葉を曲げたりはしない。己の気持ちを誓うように星に示し続ける。覚悟が足らなかつたのは星の方だ。傷つく丹恒を信じ切れず、ともに分かち合う選択肢を恐れていただけだ。

星はもう自分が何の涙を流しているのかわからなくなつた。

ただただ謝罪と贖罪の気持ちで胸がつまる。呼吸ができなくなりそうなほど。

「星」

丹恒に名を呼ばれ、頬に指が触れる。

とめどなく流れる涙を拭つて。唇をよせられた。ゆつくりとした動作で目尻と頬をなぞり、ゆつくりと唇を重ねられた。

優しい仕草に陶然となる。繋がった瞬間に熱が生まれる。穏やかな温もりは星の不安や恐れ、負い目すらも和らげてしまふ。溶けて消えてしまふ。

丹恒のことしか感じられなくなる。気が付くと再びそつと抱きしめられ、突き抜けるような切なさで胸が苦しくなるばかりだ。

この気持ちは狂気かもしれない。この先、丹恒の手を離す時がくるとしても。もう離れられない。側にいたい。互いに確信してしまっている。この想いの行き着く先が破滅でも。構わないと受け入れてしまふ。とうに狂った想いを自覚しながらも。

星は目を閉じて丹恒を受け入れた。

長い長い口づけのあと。

いつしか互い肩を寄せ合い、古海を眺めていた。幾度となく繰り返される潮騒。やがて陽が落ちて周囲が徐々に影を帯びていく。気付くと風が強くなり、体温が奪われていく。

「風が出てきたね」

身震いしそうになって。ようやく星は口を開いた。

「今夜は離さないで」

ふたりきりになりたい。

ずっと一緒にいて。

古海を見つめたまま、ぽつりと呟く。

このまま列車には帰りたくなかった。ほんのひと時の感傷でも。馴れ合いでも。丹恒だけを感じたい。改めてこの身体に彼の存在を刻み込みたかった。一瞬でいい。丹恒の全てを受け入れたい。

それが単なる思い込みでしなくても。今の星には必要だった。

丹恒はしばらく沈黙を保っていた。

星の心中を思いやっているのか、自身の気持ちを考えているのか、言葉を選んでいるのか。そのすべてかもしれない。それ以外かもしれない。星にはわからない。それでも構わない。彼の想いの覚悟はとうに知っているのだから。

やがて肩を抱いていた丹恒の手に力がこもった気がする。

「ああ。すべておまえの望むとおりに」

応じる丹恒の声音は普段通り淡々としていた。

でも星は知っている。その言葉を選んだ意味と覚悟はとても強く、重い。

星はいまだに考える。そんな彼に自分は何を返せるだろう、と。

「ん……」

口づけの隙間から甘ったるい声をもらしてしまふ。甘い香が鼻をかすめる度に頭がぼうつとする。

あれから足早に鱗淵境を後にして。姫子に遅くなくと連絡して。長楽天の宿をとって。

短い入浴をすませると。星は丹恒の唇を奪った。

舌先でねだり、口内へと侵入する。拙い動きで唇と舌に吸いつき、齒列をなぞる。無心で丹恒を味わう。星がふと気付くと布団の上へ押し倒されていた。今まで優しく応えてくれていた丹恒が動きだした。頬やこめかみ、額、耳朶。あらゆる場所に口づけを降らせてくる。その仕草でわかる。丹恒の想いを。

いつだって彼はそうだ。自分の気持ちを押しつけることなく、星に伝え続ける。時折、星の方が根をあげたくなるほど。特殊な趣味はないつもりだけれど。たまには強引にしてくれたっていいのに。そう思うくらい丹恒の仕草は穏やかで優しい。

その愛撫が首筋をくすぐり、鎖骨に吸いつく。くすぐったいような感触と安心する温もりと匂い。今までならそれだけで心満たされていたはずなのに。

（足りない……）

星は胸中でごちる。

さみしい。

丹恒の指は普段と変わらない。なのに星はもの足

りなさを感じていた。

今夜は、今夜だけは丹恒を感じていたい。心も身体も。隙間なく。傷みを覚えるくらいに。

そんなことをぼんやりと考えていると、愛撫がなくなっていた。

星が意識を取り戻せば、顔を覗き込む丹恒にじつと見つめられる。まるで許しを請うように。

何を求められているかを察して。

星はわずかに頬を染めて、そつと装束の袷を自らくつろげる。

外気が肌を撫でる。一瞬だけ胸の先端に熱が集中する。同時に注がれる視線を感じた。

「丹恒……」

湧きあがる羞恥を押し隠し、星がねだる。丹恒はわずかに熱を帯びた視線を向けているだけ。

ますます頬に熱を帯びる。星の声が上擦った。

「ね、丹恒。触って」

そつと彼の手を胸に誘導する。

「あ」

偶然、丹恒の指先が桜色の先端に触れた。それだけで甘い痺れが身体を震わせる。

「星……」

「ん。気持ちいいよ。もっと触って」

気遣わしげな声音をわざと遮る。さらに手を胸に押しつけるようにして懇願する。

丹恒の両手が胸を包み込む。温かい大きな掌がわずかに動いた。しなやかな曲線を描いていた乳房が柔らかく形を変える。

「ああ。気持ちいい……」

ため息にも似た声が自然ともれてしまう。

横目で丹恒を見つめる。察してくれたらしい彼は唇を重ねてくる。

「んっ」

相変わらず控えめな愛撫と啄むような口づけ。気持ちよさともどかしさが均衡していて身体の熱が燦りかけている。自然と彼の首筋に腕を回し、ねだるように腰を擦りよせてしまう。繋がった部分からも丹恒を求める。

それでも丹恒の指先は優しい動きだった。もっと強くしてと星が口にするか迷っていると、徐々に変化していく。何度も何度も執拗に舌へ吸いついてきたと思えば、大きな掌の中にある乳房をやわやわと揉みしだく。じわじわと丁寧にかつ強く求められ、身体の熱が蓄積されていく。思わず足を擦りよせてしまう。

いつの間にか呼吸すら貪られ、胸の先端が指や掌をかすめる度、腰を揺らして丹恒に縋りつく。

それが合図だったのか、丹恒は首筋や鎖骨に唇を落としてきた。何度も繰り返し口づけを降らし、舌を這わせて胸の膨らみにたどり着く。唾液に濡れた肌がわずかに冷たい。ただし寒いと思う暇もなく、丹恒が舐めて温もりを与えてくれる。肝心の先端以外の場所に。

とつくに待ちわびた蕾はぷっくりと膨らんで。血が集まっているように熱も帯びている。たまらず星は音をあげる。

「丹恒。舐めて」

「星……」

おずおずとねだると丹恒は眉根をわずかに寄せた。この表情は星の身体を気遣っている。

星が触れてほしい部分。丹恒はデリケートな場所だけに躊躇っているようだった。

「お願い」

本当はどろどろに舐めて強くしゃぶってほしい。

恥ずかしくて口にできない。それだけに瞳で必死に訴えてみる。少しでも伝わってほしい。そんな都合のいい夢を見ながら。

丹恒が先端を舐めた。舌先で形や柔らかさを確かめるように。くると円を描くように乳輪を舐め回して遠慮がちに先端をつつく。胸の先端に熱が集まる。きゅんつと子宮も切なげに鳴きだす。

「た、丹恒……」

足を擦り合わせながら、つい情けない声を出してしまう。徐々に理性を失わせていく丹恒の愛撫。星に抵抗する余地などない。身体の方が先に動く。腕を使って胸を寄せる。あまりボリュームはないもの

の、少しくらいは谷間が深くなる、はず。さらに真っ赤に熟れた蕾を丹恒の眼前へ差し出す。

すでに羞恥心は風前の灯だ。わかっていたはず。

丹恒に触れられたら抵抗なんてできない。与えられる快感から逃れられない。星は素直に降伏するしかない。

「もう少し強めに、吸って、ほしい……」

口にした直後、わずかに丹恒が目を瞠った気がする。

はしたなかったのか。幻滅されたのか。

額に唇を落とした。

「丹恒……？」

星が名前を呼んでも丹恒は答えなかった。ゆつくりと先端を口に含む。温かな感触に背筋がぞくぞくと震える。

「んっ」

軽くちゅつと吸われた瞬間、声がもれてしまう。続けてちゅちゅつと吸いつかれた感触で生まれた熱が子宮を刺激する。星は身をくねらせることしかで

きない。

「ん、んん、んう……」

舌先で乳首を捏ねられ、唾液ごと啜られる。とても気持ちがいい。反面もう片方の乳首が寂しいと訴えるように熱を集め続ける。

訴えることすらできず星が身動きしていると丹恒は右の乳房を頬張る。じゅつと強く吸いつかれ、視界が瞬間的にブラックアウトする。胸の熱が子宮をさらに強く刺激した。丹恒の口内に包まれているだけでも気持ちがいいのに、強く吸われてしまったてはびくんと身体を震わせるしかない。

「あつ、丹恒、そこ……ッ！」

つま先にまで響くような快感。身体をくねらせて逃がせようとしても、丹恒は執拗に刺激を与えてくる。ただ胸を吸われているだけなのに、快感の他に心満たされるような幸福を感じるのは何故だろう。たちが悪い。

丹恒は丁寧に料理を味わうように胸を愛撫しているだけに思える。星の身体が敏感なのか、丹恒の技

巧が卓越しているのか。どちらにせよ、この快感は生命の危機さえ覚える。

貪欲に食べつくすように。丹恒は無心に星の胸を舐めしゃぶる。口腔からこぼれ落ちた唾液が敷布を濡らしていく。

思考が鈍い。身体が熱い。子宮が疼く。丹恒のこ
としか考えられない。

欲しい。今すぐ彼を感じたい。

熱を孕んだ欲望なのか。煽られた雌の本能なのか。今すぐ抱いてほしい。心も身体もとろとろに溶き
れて。ひとつになりたい。

「丹恒……」

願いを込めて見つめる。その先を告げることができ
ない。

「まだだ」

星の心中を知ってか知らずか。丹恒はきっぱりと
断言した。つい眉根を寄せてしまう。

「でも……」

待てないよ。

足を擦りよせながら子供っぽい口調になってしまった。困らせるだけだと知りながら。星は丹恒の手をとり、指先に唇を触れさせる。

その瞬間、丹恒が押し黙った。何かをこらえるかのように。眉間に皺を寄せた表情に星が不安になった。

「もう少しだけ」

大事に愛したい。

告げられた声音はとても優しくて。

そう言われてしまえば星は強く出られない。つくづく丹恒に弱い。本当にどうしようもない。

ずっと星の肌を堪能していた丹恒の舌は腹部へと静かに移動する。脇腹や腿のつけ根を丹念に舐めあげ、足の間へ到達する。

星が羞恥心と息を押し殺す。そうでなければじつと見つめてくる丹恒に耐えられそうにない。蚊の鳴くような声で「舐めて」と呟けばそつと唇が触れた。反射的に両足が震える。星が意識するよりも先にそつと掌が腿を撫でる。

ぴちゃぴちゃと舌先で蜜に濡れた秘部をつつくように刺激する。星は必死で声を抑える。そうしなければ最後の理性が切れてしまう。漠然とした予感。快感に押し流されないよう唇を引き結ぶ。その瞬間、丹恒が攻め手を変えた。秘部に唇を押し当てて。舌先で中をこじ開け、強く吸る。

「んんっ！」

たまらず身体を震わせる。

背筋に強烈な甘い痺れが走る。続けて子宮がすすり泣くように熱を訴える。

「丹恒……」

気付けば呼吸は乱れている。身体はだるくて熱い。逃がすために身体をくねらせても一向に治まる気配がない。

丹恒も蜜にまみれた入り口を舐め続ける。じゅっじゅっと強く吸り、指をさし込み、中を丁寧にゆつくりとかき回す。

「あ、あ。ああ……」

じわじわと熱が押し寄せ、震えるような収縮に星

は音をあげる。限界はすぐ近く。ぽろぽろと涙がこぼれる。

「あ、丹恒。きちやう。きちやうから……！」

「ああ。わかつている。そのまま……」

異変を訴えても身体をよじつても。丹恒の愛撫はやまない。

「あ、んッ！」

弓なりに身体をそらして暴れまわる快感をやり過ぎそうとする。

じんじんとした熱とともに子宮が脈打つような感覚。頭の中が真っ白になる。強烈な刺激が弾けた。

「ああッ!!」

潮がぷしゃぷしゃと足の間から噴き出し、腿や敷布を汚していく。じくじくと燻った熱が身体を震わせる。その間も潮が流れ落ちる。普段より長い。だらしなく感じた星の頬が紅潮する。

「丹恒……」

恥ずかしい。

そう口にする暇もなかった。

「あ、んんっ！ 待っ……！」

ぐちゅりと濡れた音がした直後、子宮がきゅんと鳴く。丹恒の指が深い部分を探っている。細かく刻むような抽挿にぐちゅぐちゅと水音が響く。治まりかけていた熱がぶり返す。足を閉じようとしても指の動きは止まらない。全身の力が抜けていく。

「丹恒。丹恒……」

熱に浮かされたように意識は溶けていく。息も絶え絶えに恋人の名を呼ぶ。身体の熱は高ぶる一方。なのをやめてほしくない。

丹恒が顔を胸の膨らみに埋めた。舌を這わせて乳輪をなぞる。やがて先端を押しつぶすように舌先で刺激してきた。

「んっ」

最後にちゅつと軽く乳首を吸って。星の顔を覗き込む。

「星。もつと見せてくれ」

おまえのすべてを。

ずくんと身体の芯が疼く。

真剣なまなざしで告げられてしまつては星に拒絶など思い浮かびもしない。胸を締めつけるよう切なさ。求められた嬉しさ。晒した部分を見られる恥ずかしさ。頷くことにも時間がかかった。

ようようかすかに頷けば唇を奪われた。こんな時でも丹恒に性急さや強引さはない。確かめるように優しくゆつくりと星を求める。目を閉じて一心に応えなくなる。

意識を集中せずとも、丹恒の愛撫は敏感に反応してしまう。気持ちよすぎて思考がまとまらない。無意識に身体をわずかにずらす。丹恒を受け入れるために。

「あ」

先端が秘部の入り口に触れる。腰を揺らせば割れ目をなぞり、互いに蜜があふれて互いを濡らしている。

「星……」

「ん」

ため息まじりに名を呼ばれ、感じた身体が丹恒を

求める。はしたないと思いながらも腰を動かして恋人を誘う。

「あ、ああ……」

星が動いたことでわずかに先端が中へと入り込む。それだけで子宮が歓喜する。反射的に腰を揺らして丹恒を導く。彼もゆつくりと中へ押し入る。熱をもった部分がさらに熱くなる。丹恒の存在を歓ぶように。彼をのみ込もうとする。

「うッ」

奥に進むにつれて苦しく感じた。普段より腹部が圧迫されるような感覚に陥る。

「星」

「大、丈夫。このまま……」

やめないで。

身体を引こうとする丹恒を制止させる。腕に触れて続けてほしいと訴えた。

彼を受け入れることが久しぶりだからか。触れられた歓びで全身が敏感になったのか。中が収縮して丹恒をより強く感じてしまう。

「だが」

「キスしたい」

逡巡する丹恒を涙目で見つめる。続けてほしいと伝えるために。

「キスして。丹恒」

鼻先が触れ合う距離だからわかる。丹恒が口元を引き結び、息を飲む。肩で息をしていた呼吸が治まりかけた頃、星の願いは叶えられた。

丹恒はぐつと身体を沈めて深く星の中を犯していく。彼しか知らない。星すら知らない。生命を紡ぐ場所。

触れた部分から熱を分け与えるように。舌を絡めて強く吸いつかれた。隙間なく肌を寄せ合い、温もりが熱を帯びて呼吸が乱れる。身体が熱い。だるい。思考が溶ける。なのに心が満たされる。身体が飲む。丹恒に触られ、抱かれる度に感じる充実感に似た幸福。今にも胸を突き破りそうなこの感情は恐れを抱くほど。とつくに彼に溺れている証明のようだ。

強く求められるような口づけに夢中で応える。丹

恒はその間ずっと腕や胸、腰や腿を優しく撫でてくれていた。あやすような慰めるような。星の身体が馴れるまで。おかげで腹部の圧迫は感じなくなってきた頃、

「あ、う」

不意に星が別の異変を感じた。

「星？」

視界の中の丹恒が目を瞞る。気遣うような声音にも応えられない。期待しているような。怖いような。何かがせり上がってくるような感覚に支配される。

「動いて。丹恒」

「星……」

「お願い。気持ちよすぎてもうおかしくなりそう。まだ丹恒のことだけ考えてたいよ」

このまままでいたら気が狂ってしまうような気がして。

丹恒の存在すらこぼれ落ちそう。それが星には怖く感じた。

今夜だけは。今だけは丹恒のことだけを考えてい

たかった。彼の存在だけを感じていたかった。

「星」

繰り返される声音。それでも丹恒はそつと唇を啄むと鎖骨を舌先で舐めた。

「あっ！」

直後、胸の先端に吸いつく。同時に星の中、奥を強く挟む。

びくびくと足が痙攣する。力が抜けているせいかより強く快感が押し寄せてくる。逃がせない。

「た、丹、恒……！」

小刻みに奥をついてくる。押しつけられる度に視界が点滅した。がくがくと腰が震える。繋がっている部分が熱い。傷みを感じるくらいに。

さらに追い立てるように丹恒は胸を執拗に責めてくる。乳輪を舐め、乳首を唇で食み、口に含んでは強く吸る。吸われる度に胸と身体の芯がじんじんと甘く痺れる。ごぷつと秘部から蜜があふれた。羞恥心などとうに消え失せている。

露わにされた雌の本能が叫ぶ。丹恒が欲しい。も

つと奥にきて、中を満たして欲しい。そう思った瞬間だった。

「ああッ」

ビクンツと大きく身体が痙攣する。突き抜けた快感の余韻を感じる間もなく、丹恒が絶頂へ昇りつめた。

「く……っ！」

わずかに上気した頬。切なげに眉根を寄せた表情。色香を漂わせるその顔は星だけのもの。自分だけが知っている。

「あ」

丹恒がぐつと中へ深く押し込んできた。その直後、腹部の中から熱があふれる。どくどくと脈打ち、星の中を満たしていく。

「丹恒……」

あつい。奥が灼けそう。

乱れる呼吸の中、身体の芯に集中した熱の楔がじんじんと疼く。身体は重いのに、つま先は震えているのに、とても気持ちがいい。そつと腹部を撫でる。

丹恒の存在を確かめるように。

すると甘い口づけが降りてくる。

「ん……ふっ」

そつと唇に触れ、舌を求められ、吸われる。

こんなキスをされる度、星は嬉しくなる。丹恒がひとつになった喜びを伝えているように感じられるからだ。

無心になって彼の口づけに応えていると、

「星」

ほんの少し唇を離して丹恒に名を呼ばれた。

「すまない。星。もう少しこのままで」

視界にある恋人の表情は少し戸惑っているようだった。

繋がったまま、ゆるゆると腰を動かす。星を孕まそうとする本能だろうか。その度に中が擦られて気持ちがいい。ぐちゅぐちゅと注がれた精液が卑猥な音を立てる。

「ん。いいよ……とつても気持ちいい」

星もさらに彼を受け入れるように足の位置を変え

る。もつと奥に丹恒を感じてより強く彼を求めてしまふ。

「丹恒。もつと奥にきて。離さないで。もつともつと。中にたくさん出して」

ゆつくりと小刻みに腰を揺らして丹恒を誘う。再びあふれた蜜が精液と混じりあう。

とつくに子宮は降りてきている。彼の口づけを逃すまいと。丹恒を離すまいと。強く締めつけて離さない。

「星……」

「好き。好きだよ。丹恒。もうおかしくなるくらい」

戸惑う丹恒の唇とそつと塞ぐ。首筋に腕を絡め、腰を動かして丹恒をさらに奥へと招き入れる。

啄むようなキスが徐々に深くなり、丹恒の掌が星の肌を撫でまわす。

繋がった部分からはとめどなく互いの体液があふれてくる。空気に触れたそれは粘性を増して腿を伝い、ぐちゃぐちゃになる。構わなかった。隙間なく

抱き合い。何度も絶頂に達して。

お互い、空が白むまで。欲情を貪るように。互いを求めあつた。

ぼんやりとした意識の中、星は重いまぶたを押しあげた。

「目が覚めたか」

「丹恒……？」

徐々に視界がクリアになる。隣で横になる丹恒が指で髪を梳いた。

「どこか傷むか？」

その問いで眠りに落ちる直前までの記憶を取り戻す。

腹部は丹恒の欲望で満たされて。

喉もかすれているのか、声が出しづらい。

全身べたべたで、ひどくだるい。

改めて振り返れば、ひどい有様。それでいて笑いがこみあげてくる。

「ふふ」

「星？」

恋人が心配そうに顔を覗き込んでくる。

「私、今とても幸せだなんて」

宇宙ステーションで目覚めた時は思いもしなかった。

丹恒を好きになることも。互いの気持ちに思い悩むことも。こんな風な朝を迎えることも。

知らなければよかったなんて思わない。出会わなければよかったなんて絶対に考えない。

「丹恒」

手を握って。いつもそうしてくれるように、星はまっすぐに丹恒を見つめた。

「私を離さないでね」

願うように。誓うように。

「もう丹恒から離れられないみたいだから」

旅の終着点がどうなるかはわからない。それでも全力で戦う。最後まで諦めない。必ず丹恒の元へ帰るために。

その想いが今の星の原動力になる。自分ひとりの

生命で決着なんてつけない。必ず丹恒の、仲間の元へ戻るために。

彼への想い。死なない覚悟。失わせない力。あらゆるものを養って旅を続けていく。

何も離さない。渡さない。奪わせない。

見つめ返す瞳に強く誓う。

丹恒はとつくに知っていた。星の気持ちも。決意も。覚悟も。知っていて当然のように背負う。

「ああ。決して離さない」

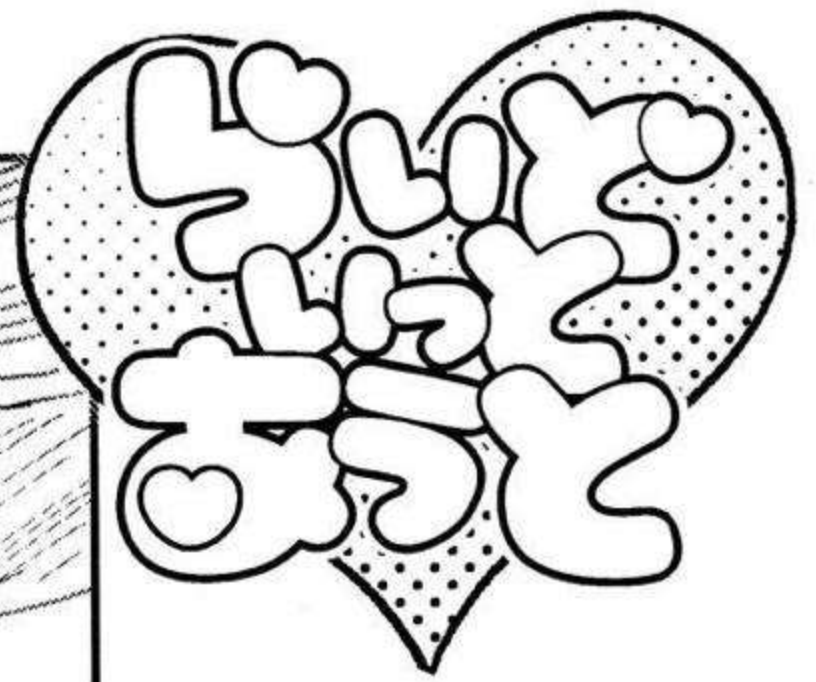
固く握り返した手。誓いを込めるように口づける。その瞬間、さらに満たされるような幸福を感じた。これから何度でも思い出すのだろう。すれ違う度。彼の気持ちを知る度。丹恒と朝を迎える度。今にもあふれそうなこの想いを噛みしめながら。

MaiKa

bsky:@ametisto-smeraldo
pixiv:40957900



◀小説用感想フォーム



桐 / トウトウ樹マシタ

@kirikirimaid

pixiv/54236665

寄稿してくれた人

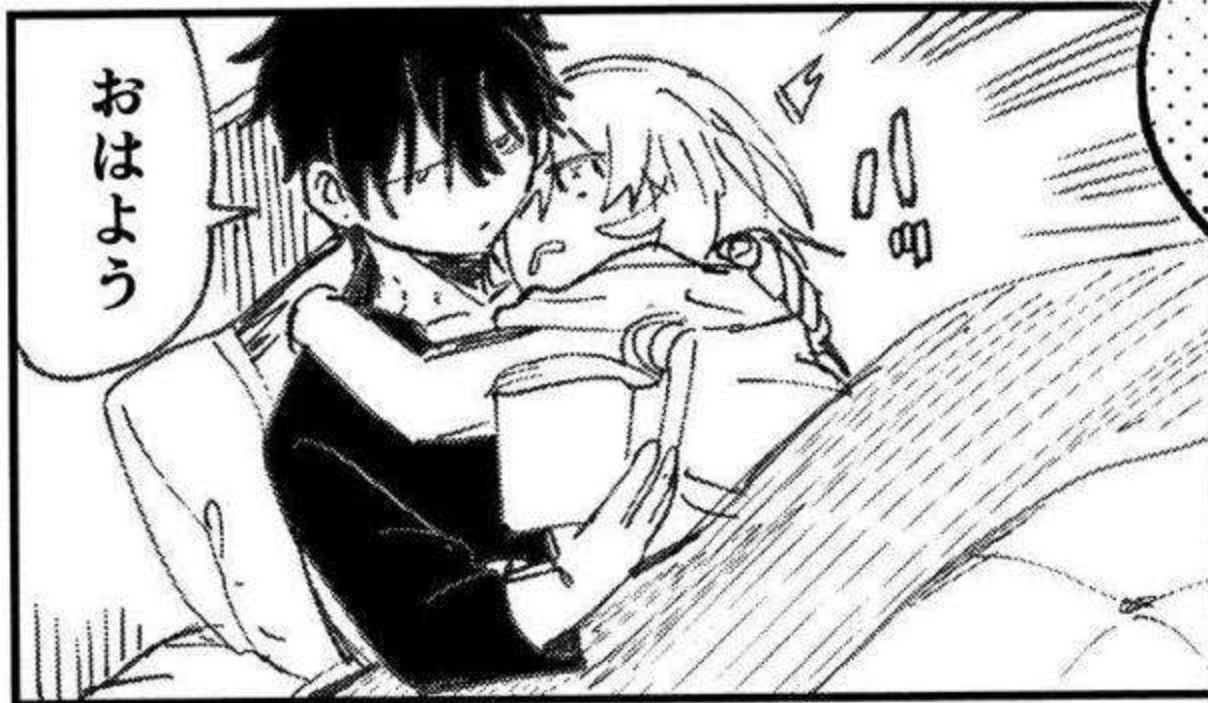
MaiKa

表紙デザイン

親友(匿名)

2026.06.28

くりえい社



もう少し体を
休めた方がいい
今晚も
試そう
好き♡

好き

俺もだ

★失敗した。

ありがとうございました



Honkai:StarRail
unofficial Fanbook

DanHeng
×
Stella

